

第 44 回 津市子どもの権利条例づくり推進市民委員会 報告

日 時：2015 年 2 月 6 日（金）18：30～

場 所：みえ市民活動ボランティアセンター 交流スペース

<参加者>（敬称略）

中村 潔（津市人権擁護委員協議会）、堀本浩史（すばる児童館）、増田和正（津市人権・同和教育研究協議会）、永合哲也（津市教育委員会事務局 人権教育課）、戸上喜之（津市こども支援課）、小林泰子（〃）、村田有香（〃）、田部眞樹子（津子ども NPO センター）、竹村 浩（〃）、野口寛子（〃）、谷口美子（〃）、山口久美子（〃）、山下恵子（〃）、川喜田ひろ美（〃）

●第 43 回市民委員会（2014 年 12 月 25 日）報告

竹村事務局長より報告（当日資料参照）

- ・市民委員会は条例づくりに粘り強く取り組んでいく。
- ・子ども委員会は仕切り直す。仕方は決めていない。
- ・3 グループに分かれて話し合い、その後、全体で共有した。

●子ども支援課より

- ・津市子どもの権利条例づくり推進市民委員会の来年度の予算は、今までは次世代育成支援後期行動計画があったので認められてきたが、計画期間が終了となる来期は、連動する形ではない可能性がある。
- ・子ども子育て支援新制度で子どもの権利条例づくりが入っていないので、予算がつかないということか。後期行動計画の方向は引き継がれると思っていた。具体的に条例づくりが謳われるかどうかは微妙だったと思うが、盛り込めなかったので予算がつかないということか。
- ・子ども子育て計画の中で権利のことはエッセンスとしては引き継がれているが、次世代育成後期行動計画と同様の記載ではない。
- ・津市の方向としては、あえて条例づくりまではする必要はないということか？
- ・作らないということではない。
- ・今までの計画は条例を作ると書いてあったが、それについてはよくわからないが、市民委員会で取り組むと書いてあったので予算の裏付けにはなった。今回の支援法で条例づくりをしないわけではないが、作ると明言しているわけではないので市民委員会として予算がつかないというのは矛盾していると思う。
- ・予算要求している限りは何か返答があると勝手に思っていた。その理由は説明されないのか。
- ・理由は必ずしもあると言うわけではない。
- ・2015 年度はどうなるかの問題。金額の問題ではなく、「つく」ということに意味を見い出していた。方向性があるかないかの問題。予算がつくつかないかで教育委員会などの出方が違うと思うので、つくという事が大事だった。
- ・計画期間の終了ということはここまでで、作るという事だったはず。しかし今年 1 年止まっていた。計画期間であるにもかかわらず動けなかった。計画終了したから終わりと言われて

もそれはないだろうという思い。

- 行政との文化の違い。今はその状況。
- 評価された事業のはず。何のための評価だったのか。
- 何のためのと言うのはやってきた側の論議。
- 条例づくりはさっき言ってきたとおり。「子どもの権利」をどう広げていったか、どう醸成していったかということの市民委員会としての取り組みは評価されたということ。だが今後予算はつかない。子育て・子育て支援会議のまとめの中で、取り組みが続くのか続かないのかは津市は明言しなかった。評価されたから続くというわけではない。
- どんなことがあろうと続けていくと言う動きにしなかった。そういうことができるとも思っていなかったこともあるが。
- 積極的に作るということではないと言う姿勢。
- 条例は行政としか作れない。予算 0 ということは行政の人は個人でしか会議に参加できないという事になるのでは。
- そんなことはない。事業費がついているわけではない。事務局経費がなくなっただけのこと。していくとすれば、みんながお金を持ち寄ってすること。
- 自分たちの団体主催なら、自分たちで出せばいいこと。ここは市民委員会としてどうするかの問題。
- 団体によっては関わるのが難しいと考えるところもあるかもしれない。
- 予算がつかないことは初めて聞いたこと。行政としての姿勢が示された。そのことで行政の部署が身の振り方を判断するという事が起きる。個人ではないから。お金自体は作るしかない。
- これから市民委員会としてどうしていくかの方向。
- 資料にあげたのは、前回の話し合いで出たものをそのままあげている。決めているわけではない。今まで骨子案までは作ったが、素案は作っていない。課題だった広めるということもできていないのでフォーラムと言う話がでてきたのだろう。子ども主体が大事ということをいろいろなところで話していくということも出ている。制定の目標をし直したいと言う希望があった。自分たちの（自分たちとは限らないが）学んでいく研修の場の設定などの事が出ていた。
- 予算のことがはっきりしていないのにこれからを考えられるか？
- 子ども委員会の子どもたちにどのように話したらいいか・・・
- 話を戻す。
- 組織で参加しているので、持ち帰り検討したい。子ども委員会も含めすべてのことに関わる。
- 津市としては市民の機運が盛り上がればという事でもないですね。
- 作っていこうとするなら参加したらいいこと、でもそうではないのに勝手なことは言えない子ども委員会の子どもたちに辛い思いをさせる。
- どういった形で子どもたちに落とし前をつけるか。
- 正直、残念である。どうしていったらいいのか。児童館としては持ち帰る。
- 結果として受け取る。行政が出て来ているという事に感謝している前提で、幕引きの仕方がまずい。建前では予算がつかなくても市の職員が出ることはあり得ること。来年度どうする

かということをお願いしたい。子ども委員会もこのままの形は難しいだろう。学校も行政が関わらないとなると責任持てないだろう。

- ・権利や人権ということは子どもの現場にいると絶対に必要だと思っている。事業を起こす時に照らすもの。今、県は子ども条例に基づいて施策等している。子どもの権利・主体をみんなが本気で考えるためにも条例を作っていくたい。主体を確立していない大人が多い。主体の確立が大事だとなかなか思えないから日常的に主体を犯すことがある。大事だと思えないとね。
- ・市民委員会のことは、津市としてどうしていくのかというところで判断する。子ども委員会をどうしていくか。子ども委員会は学校からの代表制をとっていた。結果的には個人の参加も含め、子ども会議的に参加する子ども、大人含め成長の場となった。しかし、教育委員会としては26年度に条例ができないことがわかっているの、解散・リセットすることが大事ということ提案してきた。これからはこの市民委員会がどうなっていくかが大事なのでどこに位置付けられるのかわからないが、続けていくのもありなのかなと思う。運営の仕方もう一度構築し直したい。
- ・今までの意見に対して（司会）
- ・予算の事についてまだ決定はされていない。最終は議会の議決がされたとき。今までの動きの重みは感じているし、それを財政当局には伝えているつもり。来年度の参加については今のところ明言できない。来年度になってからどうするかもその時の話。
- ・自分が条例を作りたいという気持ちで体は張れる。しかし今その気持ちになっていないことは悪い事でもなんでもない。
- ・それぞれの団体でまだ話し合えないということになる。ここで止めておくということしかできないという気がする。組織の参加云々ではなく、子どものことを考えたい。条例は今年度中にはできない。次に目指していこうという言う話でもない。
- ・子ども子育て会議の中で内容としては生かされているのでそれでよいと思っているのか？あえて条例を作る必要がないと思っているのか、新支援法にもりこんだからそれでいいと思っているのか、はっきり戻されているのか？
- ・そういうことでもない。はっきりしていない。
- ・市民委員会の行方が分からない中だが子ども委員会をどうしていくか？市民委員が仕切り直しになるということは、子ども委員会も提案のような仕切り直しも必要かと思う。
- ・現段階で26年度中に条例ができないことは明白。今後のことの提案ではない。
- ・子ども委員会はもともと学校の代表制であった。当初は子ども会議的に個人の参加もあり、両面性を持ってスタートした。代表として出てきた子どもたちも何を話して何を持ち帰るかということもはっきりしていなかった。もちろん個人として参加して自分の言いたい事言って、帰るところがないという子もいてOKだった。人権教育課としては代表制の思いが強かったということ。そのためには一旦解散してリ・スタートを切りたいと言うのが提案。
- ・子どもたちは資料No.3にあるようにいろいろな受け止めをしている。その中で「いろいろな考えや思いがあるんだということがわかった」ということは大きいなど。子どもたち同士の中でわかったということは大事な機会だった。自分自身は敢えて解散ということではなく、継続する方がいいのではと思う。

- ・解散にすると子どもたちの気持ちはどうか。気持ちをもう一度持ち上げなければならない様な気がする。
- ・条例づくりに対して気持ちのある子もない子もいた。子どもたちの思いを受け止めたいと言う気持ちが強かった。その気持ちを条例づくりにどう生かしていくかを考えてきたと思う。
- ・そこを解散してもう一度やる時に大事にしていったらいい。
- ・アンケートなどで一方的に聞くだけでなく、話し合っで深めていった。参画は簡単には作れないと思っている。仲間づくりをしたり骨子づくりを子どもたちに投げかけた。少なからず影響を受けたと思う。それがすぐに参画につながることはないだろうと思う。
- ・受け身の子どもたちが全員参画者になるということではない。リーダー的なことが少しずつ育っていく。
- ・それも含めてリスタートをしたいと思う。
- ・そうは思わない。
- ・平行線。
- ・解散するか、解散する必要はないかだが。
- ・子ども委員会が両面性を持っていた。そこが変わるわけではない。変わったのは条例を作るために集まってというニュアンスは変わると言える。そこは説明でいいのではと思う。
- ・チーム会の中ではあえて解散する必要がないのではないかと、説明でいいのではないかとということが大勢だった。今日ここに提案し議論するという事になった。
- ・新年度に向けて話は必要。区切りがあるのかと思っていた。気持ちを聴く機会がいたと思った。
- ・子どもたちの気持ち、あきらめていたり、不満に思うことを出していたり、もうええやんと思っていることが自分に重なる。味わう。子どもたちと共有する。容易に変わるわけではないが、変えていける。あきらめない事は伝える。
- ・自分の中に積みあがるし、それが組織に積みあがる。それが変わっていけること。
- ・何かをしてあげる事ではないということにはわかった。
- ・前回はほとんどが高校生だったので、もう一度話す必要があると思う。
- ・子どもたちにはその都度きちんと話している。子ども委員会で自分たちはどうだっただろうということをお話した。
- ・ひとつの挫折を味わういい機会になったと思う。
- ・中2の時から関わっている子どもがいる。最初に作る話しているから条例づくりは難しいんだなあと思ったということを書いてくれている。難しい話をしているからそう書いてくれている。
- ・大人は子どもに責任がある。作れなかったらあきらめるという姿勢を見せてしまっているのだからと思う。それが崩れるのを一番引き留めてくれていること。
- ・子どもたちにあきらめるなということをお話している以上大人もあきらめない姿勢を見せる。
- ・子どもたちにきちんと話をする。その上で学校に対しても話をしていく。これは最低の責任なので、絶対にしていく。私たちの願いも伝えていく。
- ・あとは子どもたちが考える事。決定すること。考える力をつけていかなければならない。
- ・その意味でのリセットはしなくてははいけない。

- ・子ども委員会で5月に子どもの権利条例制定が延びるよと言う話をして、その時にこれから自分の思いを伝えることをしていこうと話していたので、最後にその場を持てたらと提案した。一人一人の積み上げとするなら、場が持てなくてもそれでもよい。
- ・子どもは弱者。どこまで大人が代弁者になれるか。
- ・そういうことの話は次回にすることは可能。提案と言うよりは考えることができるので、話し合う。みんながやる気になるかどうかはわからないが。
- ・子ども委員会での話し合い、自然体だと思う。自分のやりたいという思いを出せばいいだけのこと。言ってきたからやりたいと言えればいい。
- ・意見は出たが、約束はしていないので組織的には問題ない。
- ・場の設定の話は2月の子ども委員会の時に話したらいい。結果はどうなるかわからない。
- ・いろいろ含めて次回市民委員会の日程を考える。次回までに、各団体で予算が付かなかった場合についての動向を検討して戻すことになった。

●次回日程：3月6日（金）18:30～ 場所は後日